

ZOCALO 2021 2 ▶ 3

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

「MOMASのとびら」のむこうがわ MOMASコレクション第4期 2021年2月13日(土) ~ 4月18日(日)

アート体感ワークショップ「MOMASのとびら(旧称: MOMASの扉)」は、2010年4月にスタートした教育普及プログラムで、ほぼ毎週土曜日に開催しています。一期一会の「できごと」を楽しみ、それを他者と共有することで、アートや美術館への「とびら」を参加者ひとりひとりが開いていくことを目標としています。コロナ禍によって約8か月間の休止を余儀なくされましたが、昨年11~12月には活動を一時的に再開するなど、教育普及スタッフは、感染防止対策を講じた新たな「とびら」のかたちを模索中です。

この未曾有の危機を乗り越えるためにも、過去10年間の蓄積を未来の「とびら」の鍵にしたいという思いから、今回、MOMASコレクション第4期中で『MOMASのとびら』のむこうがわというコーナー展示を企画しました。この展示では、ほんの一部ですが、当館の収蔵作品と共に、過去10年間で開かれた様々な「とびら」を紹介いたします。「とびら」の舞台裏にふれていただくと同時に、その未来を当館と一緒にご一考いただけますと幸いです。

調べていくうちに判明したのですが、これまでに開かれた「とびら」には、展示室の外にある作品に関するものも多くある模様...。ということで、今回のZOCALOでは、展示室内では紹介できなかった作品を特集します。ぜひ、ZOCALOを片手に、自分だけのお気に入りを探しながら、館内外をじっくりと探検してみてください。(K.H.)

ジャコモ・マンズー《枢機卿》(1979年)

枢機卿とは、キリスト教カトリックにおける教皇の相談・補佐役のことを指します。作者は衣服の装飾を極限までそぎ落とすことで、聖職者が持つべき高潔さを表現しました。けれども、子供たちにとって真っ白なマントは格好のキャンバスだったようで...?

《枢機卿》を扱ったプログラム

み〜っけ! 「おしゃれな枢機卿になるう」
(実施日: 2015年6月6日ほか)



黒川紀章《埼玉県立近代美術館》(1978-79年設計、1982年竣工)

当館で1番大きい作品は、建物そのものです。建築家の黒川紀章は、生物が細胞分裂するように、建物も環境にあわせて成長させたいと考えました。美術館の内外には、植物の細胞を彷彿とさせる四角形がいたるところに隠れています。

《埼玉県立近代美術館》を扱ったプログラム

工房「かくかくしかくのアートなランプ」
(実施日: 2014年5月24日ほか)



撮影: 松本和幸

柳原義達《風の中の鴉》(1981年)

量感溢れる表現で知られる彫刻家・柳原義達は、鳥をモチーフとした作品を数多く残しています。鳥は、日本古来の信仰では神の使いとみなされることもあるのと同じく、作家にとっては我が子同然の愛おしい存在でもありました。小首をかしげた鴉は、一体何を考えているのでしょうか?

《風の中の鴉》を扱ったプログラム

親子クルーズ「表そう! キラキラバード」
(実施日: 2016年7月23日)



リサーチ・プログラム: 関根伸夫と環境美術

MOMASコレクション第4期 2021年2月13日(土) ~ 4月18日(日)

美術家・関根伸夫(1942-2019)は1973年、仲間たちとともに環境美術研究所を設立しました。彼らは広場や公園をはじめとする公共空間のデザインを行うほか、モニュメント、噴水彫刻、ストーンファニチュアなどを制作し、30年余りの活動期間に400以上ものプロジェクトを手がけました。リサーチ・プログラムでは現在当館でお預かりしている関根伸夫資料のなかから、これらの仕事を写真、図面、スケッチブック、映像等でご紹介いたします。

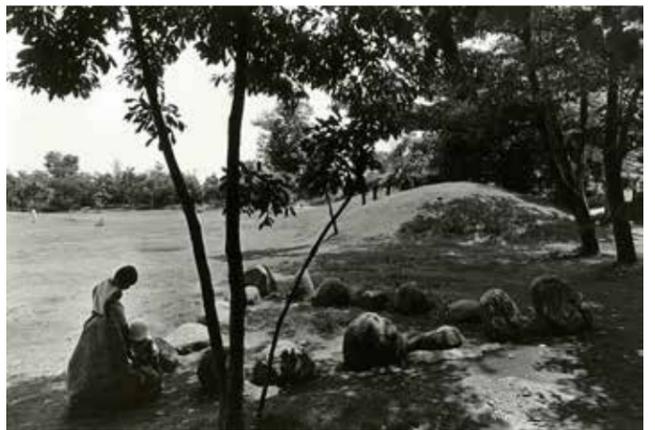
1970年、関根はヴェネチア・ビエンナーレへの参加をきっかけに、約2年間ヨーロッパに滞在します。ここで、街のいたるところに置かれた小さな広場や噴水へ、人々が自然と集い、歓談の場となる様子を見て、都市における公共空間のあり方に関心を抱きます。また景観をかたちづくる建築や彫刻の魅力に開眼し、「美術が環境の装置となれたら」と考えるようになりました。

当時のスケッチブックからは関根がこの頃、美術と建築の協働の可能性を探っていたことがうかがえます。また関根は室内空間も、ひとつの環境ととらえていたようです。照明器具や家具などを「他の機能かねる彫刻」と記すとともに、壁面や天井に組み込まれ、空間に溶け込みながらも緊張関係を生み出す彫刻の試みが見られます。

ほかにもメモには「確実なる出会い」、「出合う『場』としての彫刻」など、「出会い」ということばがたびたび出現し

ます。これは関根の作品《位相一大地》(1968)などに触発された友人の李禹煥による書籍、『出会いを求めて—新しい芸術のはじめに』(田畑書店、1971)からのものでしょう。関根が思い描いた環境美術の実践とは、「出会い」をもたらす場の創造だったのかもしれませんが。ここでの「出会い」とは、美術館のようにあらかじめ用意された空間における予定調和の「出会い」とは違い、例えば雑然とした都市空間で雨上がりの歩道を歩いているときに、空を映した水たまりを前にして、ふと視界が開けた感覚を味わうような思いがけない「出会い」を指しています。こうしてみると関根にとっての環境美術が、あくまでも作品制作の延長にあったことがわかります。帰国後に発表したエッセイで、関根はこれを「新しい(様式)の模索」と表現しました。(注)

資料からはときに、作品を見るだけでは知り得なかった作家の思索の一端を読み取ることができます。これはスケッチやメモなどの手稿類に限らず、写真や図面であっても同様です。環境美術研究所が手がけた広場や公園、モニュメントなどを美術館で展示することはできませんが、今回は資料をもとに作成したスライドショーで、その場を訪れなくともこれらを体感していただくことを目指しました。関根の仕事をこれまでとは異なる視点からご覧いただくとともに、資料を通して作家や作品に触れることのできる機会としてお楽しみいただければ幸いです。(K.A.)

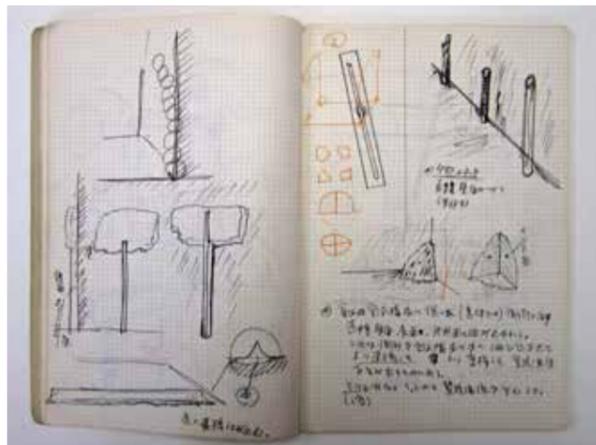


3



4

注: 関根伸夫「新しい(様式)の模索 ある覆面氏との対話から」『美術手帖』366号(1973年4月)pp. 99-106



1



2

1. 関根伸夫 スケッチブック(1970年) ※参考図版
2. 環境美術研究所 図面《ストーンファニチュア》
3. 環境美術研究所 写真《水戸双葉台団地近隣公園》1978年 撮影: 廣田治雄
4. 環境美術研究所 写真《世田谷美術館 砧公園入口モニュメント》1986年 撮影: 廣田治雄